



## 香川大学医学部生化学講座

岩部 (岡田) 美紀

2024年4月1日付けで、香川大学医学部生化学教授を拝命いたしました岩部 (岡田) 美紀と申します。この度は、研究室紹介の機会を頂きまして、関係の先生方に心より感謝申し上げます。

香川大学医学部生化学講座は、1980年4月1日に開設され、2002年6月19日の講座再編に伴い、生体分子医学講座生化学に改称し、現在に至っており、抜群のチームワークで、教育・実験に取り組んでいます。2023年9月30日に退任され、2023年10月1日に香川大学長に就任された前任教授の上田夏生先生より、45年に及ぶ伝統と歴史を誇る生化学講座を引き継ぎました。生化学分野が大きく変遷してきた現状を踏まえ、次世代に向けた革新的な生化学を目指して、新たな挑戦に全力で挑む所存です。

私は、香川県出身で、香川県立高松高校在籍時にヒトゲノムプロジェクトの壮大さと無限の可能性に魅了され、研究者を志しました。香川医科大学 (現・香川大学医学部) は、私の研究者としての原点の地です。大学院博士課程で生化学・分子生物学の基礎を学び、実験の魅力に目覚め、没頭する喜びを知りました。20年ぶりに故郷に戻り、香川大学医学部生化学講座を主宰する機会に恵まれ、再びこの地でScienceに取り組めることに大きな喜びを感じ、温かく迎えて下さった皆様に感謝の気持ちでいっぱいです。

学位取得後、よりヒトに近い疾患研究を行いたいとの思いから、2004年に東京大学医学系研究科糖尿病・代謝内科に移り、当時の教授であった門脇孝先生 (現・虎の門病院院長、日本医学会長)、現教授である山内敏正先生のご指導のもと、20年にわたり、共に生命科学研究に邁進してきました。東京大学では、一貫して、糖尿病など代謝性疾患における病態の分子メカニズムの解明と創薬研究に一心に取り組んできました。

香川大学では、これまでの研究成果を基盤として、「Translational biochemistry」の実践を目指しています。教育・研究のあらゆる側面で橋渡しの役割を担いたいと考えています。基礎から臨床へ、既知から未知へ、分子から疾患へ繋がる探究心豊かな多角的視野を持った医師・研究者を育成するための橋渡しの生化学教育を推進し、学生には、実験の楽しさや生化学という学問の面白さや魅力をできる限り分かりやすく伝えたいと日々、あらゆる力を尽くしています。着任して半年経ちますが、学生に楽しさが少しずつ伝わっていることも実感し、既に実験に興味を抱いた学生が研究室に通い始め、その姿に大きな喜びを感じると共に、無限の潜在能力を秘めたその成長に大いに期待



しています。研究面では、スタッフや学生と共に力を合わせ、世界的発見に挑戦したいと考えています。代謝性疾患を中心に、新しい予防法や治療法、薬物の開発、疾患の診断法の改善を通じて、患者さんに貢献し、健康長寿に寄与したいと考えています。例えば、糖尿病や肥満関連疾患の原因となる酵素や膜受容体などのタンパク質の機能を明らかにし、それをターゲットにした創薬や予防法の確立に挑んでいます。同時に新しい学問分野の創成に繋がるような挑戦的プロジェクトにも力を注ぎたいと考えています。さらに、運動不足の状態をScienceで解決しようとする取り組みとして、AIやウェアラブルデバイスを組み合わせた新しく画期的な運動バイオマーカーの開発なども進めています。現在、ムーンショット型研究開発事業 [プロジェクトマネージャー：南学正臣教授 (東京大学)]、科研費の国際共同研究加速基金 (国際先端研究) [研究代表者：染谷隆夫教授 (東京大学)] をはじめとする競争的資金のプロジェクトを通じて推進しており、国内外の共同研究も展開しています。さらに、多くの臨床教室や工学系をはじめとする異分野との共同研究、産業界との実用化・社会実装に向けた産学連携にも力を注いでおり、さらに展開して参ります。

「Translational biochemistry」は、生化学の枠を超えて、あらゆる学問を繋げ、橋渡しをします。生化学を中心として、生物学から創薬研究へ、分子レベルから疾患の病態解明へ、広範な学問分野にわたる知識・データ・技術革新を統合し、人材交流なども含めた橋渡しもしながら、既知の知識・データから未知の領域への挑戦を続けていきたいと考えております。若手の先生方はもちろん、ベテランの先生方でももう一度楽しく実験してみたい、学位を取得したい、何か一緒に面白いことをしたいとお考えの先生方をス

スタッフ、ポスドク、大学院生、協力研究員など様々な形で常に仲間として歓迎しております。バックグラウンドや経験も本当に全く問いませんので、どうぞお気軽にお声がけいただけましたら幸いです。

研究者になりたいという漠然としたささやかな夢から始まった私の研究者人生は、ピペットマンを握って30年近くになりますが、未だ道半ばです。Scienceの探求には終わりが無いところこそ、その最大の魅力があります。この道中、数えきれない先生方、先輩、後輩、そして仲間

恵まれ、共に全力で走り続け、多大なるご指導、ご支援、ご助力をいただきましたこと、関係する全ての皆様に心より感謝申し上げます。

これからの研究者人生の全てを捧げ、Scienceの魅力を本質的に理解できる医師・研究者の育成、健康長寿の実現、さらには、Scienceの未来に貢献したいと考えております。今後ともご指導、ご鞭撻の程、何卒よろしくお願ひ申し上げます。